

生産コストの低減と大型施設・

機械の利用



生産費の低減は出来るのか
昭和六十二年度の米の政府買入価格が別表のように安くなりました。政府の買入価格が下がったことは食管制度が出来て始めてのことです。米だけは「聖域」の名残りを残しておりましたが、それも後退せざるを得ない厳しい情勢へとすすみつつあると考えて良いでしょう。最近農業委員会に小作料の相談が多いようです。転作の配分も含め、「小作を辞退したい」「小作料が高すぎるのではないかなど水田の貸借についても水田経営の厳しさが始めています。ご承知のように国も水田農業確立対策の推進など転作物物だけでなく水稲生産を

含めて水田経営の生産性の向上を推進しております。その一般的な対策として低コスト生産方式が大切となります。果して低コスト生産が可能なのか、どのようにしたら出来るのか考えて見ましょう。
大型機械による大豆の播種作業から

農業機械銀行に79馬力の大型トラクター、耕起、整地、施肥、播種、除草剤の散布が一行程で作業できるアタッチを装備しております。今年の集団転作の大豆から利用してみました。農協の実績から調べて見ますと10アール当り作業時間が二八、二分、作業料金は漸定価格を約五五〇〇円程度として、可なりの省力と経費の節減が出来たことになりました。刈り取りも大型コンバインの導入を考えておりますので今後の大豆作は大型の機械体系でコストを下げる事が可能になると考えています。
高齢化と大型機械による生産のシステム化を考える
「もう年ですから水田をあずけたい」、「利用増進法にもとづく契約を更新したい」など貸し手側の相談が漸次増加の傾向にあります。もう五年、そして十年たちますと大変な状態になることが予想されます。話しによりますと基

盤整備のおくれている地帯には荒らし田が次第に増加しつつあると聞いております。第七農区の農家の方がこんなことを言われました。「今では、かつがつ水田を作っているが万一つくれなくなってもうちには宮農集団があり機械作業がお願い出来るので安心だ」と。お互いに現実にお互いから、一年たてば一二年を取るといふことをお考えいただき、今のうちから、これらの対応を考えていかねばならないと思います。それには大型機械による生産のシステム化に頼るしかないと思います。
転作集団の機械利用体系を水稲に持ちこむことが出来ないか

農区、宮農集団そして農家のご努力で転作の集団化、ブロックローテーション等もすみ、大型機械作業体系によりシステム生産が推進されつつあります。しかし水稲作は殆ど自前の生産方式を取っています。先日第五農区の話合いに参加させていただいた時、あるリーダーの方から「農区で大型コンバインを入れて、水稲を含め大型機械作業体系を組めば面白いんだが」という話も伺いました。また第二農区の上中小野宮農集団の方

昭和62年産米穀の政府買入価格

(水稲うるち・軟質・裸・玄米60キログラム当たり：円)

	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類
1 等	17,804	17,654	17,404	17,204	16,804
2 等	17,484	17,334	17,084	16,884	16,484
3 等	-	-	16,084	15,884	15,484

が来られ基準小作料の問題から、水稲を含めた集団による機械利用体系を組めば、コスト低減が図られるのではないかと意見もいただき近く話し合いを持ちたいと考えています。

ここらで、もう一度新しい生産方式を考えて見ませんか
歴史的に水稲単作を農業の基本体系として来た本町の農家に取ってまた水稲は「聖域」としての意識が強いと思います。また特別な農家を除いては水稲生産に係る作業機械の殆どを装備しています。この保有機械と新しい生産システムによる大型機械利用との関連をどう調整していくかなど、いろいろと課題が多いと思います。しかし、このままでは新しい生産方式の切り切れず生産が後退していくことも考えねばならないと思います。